

漂流民ゴンザのアクセント(下)

坂口, 至
宮崎大学講師

<https://doi.org/10.15017/10482>

出版情報 : 文献探究. 14, pp.1-18, 1984-06-15. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

漂流民ゴンザのアクセント(下)

坂口 至

— 3 —

前節までに筆者は、漂流民ゴンザの言語資料に豊富に見られるアクセント符号の性格を明らかにするために、二音節名詞のアクセントを例にとって検討して来た。その結果、《ゴンザの出身地は、現代鹿児島主流アクセントの行なわれる地域のどこか》という蓋然性の高い仮定のもとで、

- (1) 二音節名詞単独形のアクセントは、現代鹿児島方言の自然な発音におけるアクセントとほぼ一致する。
- (2) 一音節助詞接続形のアクセントについては、いわゆるB型所属の語彙の場合は、現代鹿児島主流アクセントの相と一致しない型が想定されたが、一方A型所属のものは、型の決定までには至らない。

という一応の結論が導かれた。これによって、ゴンザのアクセント符号の信頼性に一定の目処がたつたと思われるが、残された課題もあり、またゴンザのアクセントを体系的に論ずるには、二音節名詞だけでは不充分であるから、引き続き三音節四音節等の多音節語の検討にはいろいろと思う。

が、その前に、二音節語には名詞の外に動詞や形容詞が残っている。まずこれらのアクセントの検討を済ませておこう。

I. 二音節動詞

以下に示すように、二音節動詞の基本形(終止形をさすがここでは連体形も含める)に対して、ゴンザのアクセント符号は、現代鹿児島主流アクセントに見られるA型B型の区別なく、すべて第一音節に付されている。

行く(ík) 要る(ír) 生む(úm) 置く(ók) 居る(ór) 買う(káw) 刈る(kár) 聞く(kík)
 汲む(kúm₂) 焚く(ták) 注ぐ(cúg₃) 継ぐ(cúg) 摘む(cám) 吊る(cúr₂) 飛ぶ(tób₃)
 泣く(nák₂) 鳴る(nár) 張る(fár) 挽く(fík) 遣る(jár) 呼ぶ(jób, jów) ; 為る(súr₅)
 ≡ 以上 ◀ A型 ▶

有る(ár₃) 打つ(úc) 織る(ór) 書く(kák₃) 捲く(kák) 勝つ(kác) 噛む(kám₂) 切る(kír₂)
 咲く(sák₂) 出す(dás) 照る(čér) 取る(tór) 成る(nár₂) 飲む(nóm₂) 這う(fáw)
 吐く(fák₂) 吹く(fúk₂) 降る(fúr₃) 読む(jóm) ; 見る(mír) ; 来る(kúr) ≡ 以上 ◀ B型 ▶

〔注1〕

この結果から直ちに、《ゴンザの二音節動詞基本形のアクセントは、A型B型ともに $\overline{00}$ 型で区別がなかった》とすることは勿論できない。なぜなら、《ゴンザの出身地は、現代鹿児島主流アクセントの行なわれる地域のどこか》という最初の仮定を保持する限り、ゴンザのアクセントには、少なくとも二つの型の区別が存在していたはずだからである(注2)。

ところで、現代鹿児島方言における二音節動詞基本形のアクセントは、丁寧な発音では、二音節名詞単独形同様、A型(いわゆる第一類)～ $\overline{00}$ 型、B型(いわゆる第二類)～ $\overline{00}$ 型となるが、第二音節が必然として狭母音[ɨ]を含むために、自然な発音では、その

第二音節が独立性を失い、B型アクセントは、 $\overline{00}$ 型として実現する【注3】。これは、既に見た二音節名詞単独形のB型アクセントのうちで、第二音節に狭母音[i] [o] [u] [ɔ] や撥音を含む語のアクセントと全く同じである。ゴンザのアクセント符号の打たれ方も、名詞の場合と同じであるから、ゴンザの丁寧な発音における型としては、現代鹿児島主流アクセントと同じく、A型 $\sim \overline{00}$ 型、B型 $\sim 0\overline{0}$ 型を再構してよさそうである。ただし、各動詞が現代鹿児島主流アクセントと同じ型に属していたかどうかは、基本形では判別不可能と云わざるを得ない【注4】。

II. 二音節形容詞

ゴンザの資料では、形容詞の基本形は、いわゆる「イ語尾」「カ語尾」両方が見られる。このうちイ語尾をもつものは、連母音融合に続いて長音短呼と疑われる変化を蒙っており、その本来の姿が失われているので、ここでは取り扱わないことにする。二音節の場合、ゴンザの言語に現われているのは、次の一語である。

良い(jokàio)

現代鹿児島主流アクセントでは、この語はB型($0\overline{0}$ 型)所屬であるので、ゴンザのアクセントはこれと一致している。

さて次に、ゴンザの言語資料における三音節語のアクセントについて、現代鹿児島主流アクセントでは、それらの語は、名詞・動詞・形容詞といった語性の別にかかわらず、丁寧な発音において、A型 $\sim \overline{000}$ 型、B型 $\sim 00\overline{0}$ 型の二型として実現する。ゴンザのアクセント符号とこれを順次比較してみよう。

III. 三音節名詞

$\overline{000}$ 型 \sim 小山羊(kójak') 戸所(tókors) 平地(fírač) 昔(múkaš) \equiv 以上 <A型>

画家(jěkak') 手負い(téoi) 肌着(fádag) 齒無し(fánaš); 書物(sómoc); シャボン(sábon) \equiv 以上 <B型>

$\overline{000}$ 型 \sim 幾ら(ík-ra) 踵(kíbis) 車(kúrmas) 煙(kémui) 此方(kóčč) 小人(kópto) 小麦(kómug'z) 小指(kóib') 継ぎ目(cúgině) 戸口(tógučč) 納戸(nándo) 盗人(núsdó) 祭(mácuí) 息子(músko) 娘(músměz) 六つ(múcc) 八つ(jácc) 四つ(jócc); 頭巾(dzúkin) \equiv 以上 <A型>

明日(ásta) 油(áb-ra, ábi-ra) 戦(ík-saz) 苺(ěgo) 鱗(ínko) 頭(kásta) 鬘(kúcwá) 雀(súz-mě) 跛(čínba) 聾(cúnbu) 涙(nám-da) 柱(fásta) 鬚(bínta) 袋(fúkro) 枕(mák-ra, mákia) 賤(mápta) 病(jámme)【注5】; 一度(ědo); 合羽(káppa) \equiv 以上 <B型>

$00\overline{0}$ 型 \sim 田舎(inákaz) 女(onágo) 此方(konáta) 酒屋(sakájaz) 捨子(sčégo) 所(tokóro) 戸棚(todána) 日陰(fkáge) 日向(fináta) 継子(mamákoz) 港(minátoz) \equiv 以上 <A型>

袷(awáše) 従兄弟(itógo) いろは(irófa) 表(omóče) 言葉(kotóba) 背中(senáka) 卵(tamágoz) 畑(fadákéz) 仏(fodókě) 寡夫(jamámě) \equiv 以上 <B型>

$00\overline{0}$ 型 \sim 明り(akái) 鋤(ikái) 妃(ksák') 仕事(sgot) 所(tokór) 羊(fóuz) =つ(

ftác); 普請(fjín) = 以上<A型>

家鴨(afír) 五つ(icúc) 鼻干(ibík) 田炉裏(jurúi) 兎(uság) 魚鱈(umág)
 鏡(kagám) 篋(kakéf) 芥子(karás) 烏(karás) 胡瓜(kiúi) 藥(ksúi)
 周囲(gurúi) 白味(ftóm) 師走(swás) セツ(naná) 鉛(namá) 鼠(nědzú-
 m) 齒茎(fagúk) 鉢(fasám) 肌着(fadág) 一ツ(ftóca) 蚯蚓(mimíz)
 目付き(měcúk); 九月(kugwác) 下男(genén) 五月(gagwác) 五百(gofják)
 四月(sigwác) 地獄(dzigók) 四百(sifják) (注6) 杓子(sakús) = 月(nigwá-
 c) = 千(nifén) = 百(nifják) 癩脚(fkják) = 以上<B型>

○○○型 ~ 明日(ajtà) 頭(atamà) 霰(arajè) 市場(ič-bà) 男(otokò) 瓦(kawarà) 白
 髪(fagà) 虱(staměz) 卵(tamagò) 畑(fadakě) 仏(fodokěs) 寡夫(jama-
 mě) = 以上<B型>

以上を表にまとめると、下のようになる。なお、○は、アクセント符号の付されている音節の直後にあり、アクセントを動かす可能性のある音節——狭母音[i] [e] [o] や撥音を含む音節を示す(注7)。

現代鹿兒島 方言の アクセント	A型 [○ $\bar{\bar{O}}$ ○]	B型 [○○ $\bar{\bar{O}}$]
① ○○○型	4 (8)	6 (6)
② ○○○型	19 (27)	19 (22)
③ ○○○型	11 (18)	10 (15)
④ ○○○型	8 (8)	36 (45)
⑤ ○○○型		12 (17)

周知のように、三音節名詞の場合の、現代諸方言間のアクセント型の対応は、二音節名詞に比較すると、かなり不規則である。同一方言のアクセントでも、歴史的推移の過程で、型から外れて個別的に変化する語が、二音節名詞よりも多かったことが考えられる。従って、上の表の数字の多寡にそのまま信を置いて型を再構するのは、いくらか危険であるかもしれない。けれども、既に見たく二音節名詞+一音節助詞>の場合の数字の現われ方とこれを比較してみると、○○○型~B型という対応をひとまず「措けば」、その傾向は似ていると言えそうであるから、敢えてアクセント型を再構してみることにしよう。ここでも、あらかじめ次の仮定を設けてから、<現代鹿兒島主流アクセント同様、二型であった>

まずA型は、上の表の②~④から○○ $\bar{\bar{O}}$ 型、即ち現代鹿兒島主流アクセントと同じ型を再構し、①を例外(異語数10%、延語数13%)とするか、①~④から○○○型を再構するかであろう。①②から○○○型を再構するのは、③④の例外(異語数45%、延語数43%)が多すぎて無理と見る。ただし、<二音節名詞+一音節助詞>のところで考えたように、○○○型から○○ $\bar{\bar{O}}$ 型または○○○型へ移行する過渡期にあると見ることも不可能ではない。ここでは一応、例外の少ない方から、○○ $\bar{\bar{O}}$ 型かまたは○○○型を安定した型として推定しておくことにする。

一方B型は、安定した型としては、②~④から○○ $\bar{\bar{O}}$ 型を再構し、①と⑤を例外(異語数22%、延語数22%)とするか、④⑤から○○ $\bar{\bar{O}}$ 型、即ち現代と同じ型を再構し、①~③を例外(異語数42%、延語数41%)とするかの二つであろうが(注8)、後者は例外が多すぎる気がするし、前者の例外も無視できるほど少ないとは言えない。むしろ、○○○型

を本来とし、 $\text{○○}\overline{\text{○}}$ 型へかなり移行しつつある過渡期と見た方がよいのではないか。同一語で両様のアクセント表示の見られるもの(卵・畑・仏・寡夫)が存在するのも、この考えを支持するかもしれない。

しかしながら、以上の推定は、あくまでゴンザの時代のアクセントが現代同様二型であったと仮定してのことで、もしそうでなかったならば事情は変わってくる。

というのは、 $\text{○○}\overline{\text{○}}$ 型のアクセント表示のなされている単語に、いささか傾向らしきものが見られるようだからである。金田一春彦氏の三音節名詞の類別(注9)に従って、 $\text{○○}\overline{\text{○}}$ 型の単語を分類すれば、「頭」類6語(明日・頭・男・瓦(注10)・白髪・仏)10例、「形」類2語(穀・寡夫)2例、「兜」類2語(卵・畑)2例、「免」類1語(虱)2例、不明1語(市場)1例となっており、類別のわかつているものの中では、「頭」類の割合が断然高い。これは偶然であろうか。もちろん、「頭」類に所属する語がもともと多いという事実もあるし、 $\text{○○}\overline{\text{○}}$ 型に限らず、 $\text{○○}\overline{\text{○}}$ 型の単語の中にも丁寧な発音で $\text{○○}\overline{\text{○}}$ 型に実現するものがあつた可能性も考えなければならぬから、上の数字は割引いて考える必要があるかもしれないが、もし「頭」類に $\text{○○}\overline{\text{○}}$ 型にアクセント表示される必然性があつたとすれば——思い起されるのは、やはりその出自アクセントである。

〈二音節名詞＋一音節助詞〉の所で既に触れたように、《ゴンザのアクセントや、現代鹿児島主流アクセントを含む九州西南部二型アクセントは、大分市を代表とする豊前・豊後アクセントの後裔》ということが事実だとすれば(注11)、ゴンザのアクセントは、次のような大分市アクセントの類別体系から変化したことになる。

「形」類・「小豆」類	$\text{○○}\overline{\text{○}}(\triangleright)$ 型
「頭」類	$\text{○○}\overline{\text{○}}(\triangleright)$ 型
「命」類	$\text{○○}\overline{\text{○}}$ 型
「免」類・「兜」類	$\overline{\text{○○○}}$ 型

さすれば、「頭」類におけるゴンザのアクセント型は、 $\text{○○}\overline{\text{○}}(\triangleright)$ 型の大分市と同じであつたか、 $\text{○○}\overline{\text{○}}$ 型の現代鹿児島主流アクセントと同じであつたかのいずれかであるべきで、これらの中間的な型は考えられない。そして、この二者はいずれも第三音節の後に音の下がり目をもつ型である。ゴンザの「頭」類に $\text{○○}\overline{\text{○}}$ 型のアクセント表示が多い理由は、これによって説明できるのではないだろうか。ただし、やや問題なのは、「頭」類の中には $\text{○○}\overline{\text{○}}$ 型のアクセント表記になっている語(明日・戦・頭・袋)もあることである。この形からは $\text{○○}\overline{\text{○}}$ 型はもちろん、 $\text{○○}\overline{\text{○}}$ 型の再構にも無理がある。むしろ丁寧な発音において $\text{○○}\overline{\text{○}}$ 型を想定するのが妥当である。このことも考慮に入れるならば、ゴンザの時代の「頭」類のアクセントの実態は、あるいは次のようであつたかも知れない。

《他 α 類の三音節名詞B型アクセントに花がけて、語末音節を高める型に変化してしたが、当時の多音節語B型のアクセント体系(四・五音節語については後述)に類推して、末尾から二音節目のみを高める場合もあり、両者の発音のユレが存在していた》

なお、「形」類・「小豆」類や、「免」類・「兜」類の、大分市アクセントからゴンザのアクセントへの移行は、既に見た〈二音節名詞＋一音節助詞〉の第一・二類や第四・五類の場合と全く平行的な経過を辿つたものと考えられる。

以上、多くの点で明確さを欠いているけれども、一応の三音節名詞単独形のアクセント型の再構を試みた。

(5)

次に、二音節名詞の場合と同じ様に、三音節名詞に一音節の助詞が接続した場合のアクセントをしてみることにしよう。現代鹿児島主流アクセントでは、A型～○○○▷型、B型～○○○▷型として実現するが、これと比較したゴンザのアクセントは、次のようになっている。

○○○▷型～車の(kúrman)＝◀A型▶

鱗イ(írkoto)刀イ(kát nato)刀エ(kát naw); 合羽イでは(káppadz a)＝以上◀B型▶

○○○▷型～此方イ(konátan)此方エ(konátawo)＝以上◀A型▶

仏イの(fodókén)＝◀B型▶

○○○▷型～鱈イの(iwáfnoz)昂イの(sbárno)鼻血イが(fanádziga)羊イの(fcúznoz); 布田イでは(ftóndza); ボタンイでは(botándza)＝以上◀A型▶

左イの(fidáinoz)一人イは(ftóíwa); 書物イが(somócg a)日本イの(nifónno)飛脚イは(fkja'kwa)＝以上◀B型▶

○○○▷型～瓦イで(kawarádze)背中イの(senakáno)＝以上◀B型▶

○○○▷型～卵イの(tamagónz)仏イの(fodokénz)＝以上◀B型▶

以上を数表にまとめると、下のようになる。

現代鹿児島 ゴンザの アクセント	A型 [○○○▷]	B型 [○○○▷]
○ <u>○○▷</u> 型	1 (1)	4 (4)
○○ <u>○▷</u> 型	2 (2)	1 (1)
○○ <u>○▷</u> 型	6 (8)	5 (6)
○○○ <u>▷</u> 型		2 (2)
○○○ <u>▷</u> 型		2 (7)

全体的に用例が少なく、また、B型のアクセント表示に統一性が見られないようであるから、ここでは具体的なアクセント型の再構成を差し控えることにしたいが、次の二つの事実には注意しておきたい。

(1) A型、B型ともに、現代鹿児島主流アクセントと同じ型、即ち○○○▷型(A型)、

○○○▷型(B型)の反映と積極的に見なすべきアクセント表示は見当たらない。

(2) 単独形にも用例のある語のうち、A型の語(車・此方・羊)は助詞が付いてもアクセント符号は動かないが、B型の語(鱈・刀・合羽・仏・左・一人・書物・飛脚・瓦・背中・卵)の中には、助詞が付くとアクセント符号が後ろの音節にずれるもの(仏・書物・背中・卵)がある。

この<三音節名詞+一音節助詞>のアクセントは、四音節語のアクセントに準ずるものと考えられるので、それらの検討を俟つことにしたい。

IV. 三音節動詞

○○○型～洗イう(arawz)喰イらう(kúraw)泊イまる(tóman)曲イがる(mágar)回イす(mówas)貰イう(móraw, mórau)渡イる(wátanz)笑イう(wáraw)＝以上◀A型▶

○○○型～送イる(ókun)拍イる(kúbinz)擦イる(násur); 枯イれる(kájun)燃イえる(mójun)＝以上◀A型▶

出来る(dzékur); 混せる(mázur) = 以上 < B型 >
 ○○○型 ~ 塞く(fság3) = < A型 >

動く(igók) 疼く(udzúk) 呻く(umék) 拝む(ogám) 起す(okós) (注12)
 隠す(kakús2) 被る(kabúr) 裁く(sabák) 叩く(taták3) 作る(ckúr6) 通る
 (towór) 灯す(tobós) 流す(nagás) 習う(naráw) 憎む(nikúm) 走る(fasír3)
 光る(fkár2) 戻る(modór); 起きる(okír) 落ちる(ocúr) 出来る(dzékúr)
 ; 建てる(tacúr) 逃げる(nigúr) 飛ける(fagúr) 寝める(fomúr) 見える(mijúr)
 見せる(misúr) 分ける(wakúr) = 以上 < B型 >

これらを数表にまとめると、次のようになる。

現代鹿児島 ゴンザの アクセント	A型 [○○○]	B型 [○○○]
○○○型	8 (12)	
○●○型	5 (7)	2 (2)
○○○型	1 (3)	28 (39)

この結果から、第一に指摘されることは、現代鹿児島主流アクセントでA型となっている語は、ゴンザの言語では、異語数93%、延語数86%の高い割合で第一音節にアクセント符号が打たれ、B型の語は、異語数93%、延語数95%の高い割合で第二音節にアクセント符号が打たれており、A型B型の区別がきわめて明瞭であることである。

そして第二には、このようなアクセントの現われ方は、現代鹿児島方言の自然な発音におけるアクセントによく似ていると考えられることである。というのは、現代鹿児島方言における三音節動詞基本形のアクセントは、丁寧な発音でこそ、A型～○○○型、B型～○○○型となるが、第三音節が必然として狭母音[ɪ]を含むために、自然な発音ではそれが独立性を失い、全体として二音節語に準ずるアクセントの現われ方、即ちA型～[○○○] B型～[○○○]として実現するからである。ゴンザの言語では、第三音節に母音字母が現われないうことを考慮すれば、ゴンザのアクセント符号と現代アクセントは、ほぼ完全に符合していると言って良さそうである。

そうすると、ゴンザのアクセントも、丁寧な発音で、現代鹿児島主流アクセントと同じ、A型～○○○型、B型～○○○型であったと考えてよいだろうか。これはそう簡単には決められないようである。なぜなら、三音節語アクセントの体系性を考慮に入れれば、B型は○○○型を想定したくなるし、またA型も○○○型の可能性も残されていると思うからである。このような型でも、ゴンザのアクセント符号は、同じ打たれ方になると思われる。従って、厳密には不明とすべきであるが、ここでは体系性を重視して、A型～○○○型または○○○型、B型～○○○型を、丁寧な発音における型として想定しておきたいと思う。

なお、以上の二つ以外に第三の型を想定することは、現われた数字からも、系統論的にも必要ないと思う。ついでに、その系統について触れておけば、大分市を代表とする豊前・豊後アクセントからゴンザのアクセントへの移行は、A型(いわゆる第一類)は○○○型→○○○型または○○○型となり、既に触れた<二音節名詞第一・二類+一音節助詞>や三音節名詞「形」類、「小豆」類と同様の経過を辿ったものと考えられ、B型(いわゆる第二類)は豊前・豊後アクセントの○○○型にとどまっている状態と考えることができるから、無理は生じないはずである。

V. 三音節形容詞

二音節形容詞のところでも述べたように、いわゆる力語尾のものだけを取り上げる。以下のようである。

〇〇〇型～長い(nágaka)＝＜A型＞

〇〇〇型～厚い(ácka) 薄い(úska) 丸い(mánka)＝以上＜A型＞

寒い(sámkaz) 高い(tákka) 悪い(wánka); 欲しい(fóška)＝以上＜B型＞

〇〇〇型～赤い(akáka) 浅い(asáka) 旨い(mmáka₄) 暗い(kuráka) 長い(nagáka)
＝以上＜A型＞

青い(awóka) 臭い(ksáka) 黒い(kuróka) 白い(stóka) 狭い(jemáka) 早い(fajáka) 深い(fkáka) 太い(ftóka₃) 弱い(jowáka)＝以上＜B型＞

〇〇〇型～黒い(kurókà) 白い(stókà) 広い(firokà) 太い(ftókà₃)＝以上＜B型＞

以上を表にまとめてみると、次のようである。

現代鹿児島 ゴングの アクセント	A型 [〇〇〇]	B型 [〇〇〇]
〇〇〇型	1 (1)	
〇〇〇型	3 (3)	4 (5)
〇〇〇型	5 (8)	9 (11)
〇〇〇型		4 (6)

用例は必ずしも充分とは言えないが、上の数字の現われ方は、既に見た＜二音節名詞＋一音節助詞＞や三音節名詞の場合によく似てはいないだろうか。＜A型所属の語は、第二音節までに必ずアクセント符号が打たれること＞、＜B型所属の語は、各音節にアクセント符号が打たれるが、第二音節が一番多いこと＞といった傾向が。

とすれば、ゴングの言語における三音節形容詞基本形のアクセントは、A型は、安定した型としては〇〇〇型かまたは〇〇〇型が想定され、B型は、〇〇〇型を標準とし、現代アクセントと同じ〇〇〇型へ移行しつつある状態であると考えてよさそうである(注13)。

なお、系統的にも、豊前・豊後アクセントの〇〇〇型(いわゆる第一類、A型相当)、〇〇〇型(いわゆる第二類、B型相当)からゴングのアクセント型への移行は、三音節動詞の場合と全く平行的に理解され、無理がないと考えられる。

以上で、三音節語の検討を終わる。四音節語、五音節語のアクセントについては、節を改めて述べることにしよう。

〔注1〕この他に1例、食う(kwù)～B型があり、村山氏はクウと二音節に仮名翻字されているが、kùとウロマ字綴りもあり、二音節なのか一音節なのか判断がつかないからで、ここでは除外しておいた。

〔注2〕言うまでもなくこれは＜型の分裂は特定の条件下でしか起り得ない＞というアクセント変化における通則を利用したものである。＜他方言アクセントの侵略＞を考へることも可能であるが、これは他に解決の仕様がないうちに持ち出せばよいことである。

〔注3〕平山輝男氏『九州方言音調の研究』(学界社、1951)参照。なお、以下現代鹿児島主流アクセントに触れる時には、特に断らないう限り、すべてこれに拠る。

〔注4〕ここでは各活用形のアクセントまで詳しく触れている段階はないが、例えは、未然形のうち打消助動詞「ン」

が接続する形のアクセントは、jóban(叫はん、A型) kíkan(聞かん、A型) íwan(言はん、A型) nomán(飲まん、B型) narán(成らん、B型)などになっており、A型B型の区別が現われているようである。

(注5) これは「マイ」の連母音融合を起した乾化形と見らるが、『全国アクセント辞典』の「全国アクセント比較表(2)」にその字の形で載せてあるので採用した。○○型～A型の子(omógoa)も同様である。

(注6) 『全国アクセント辞典』ではA、B両型あるが、B型を先に出してあるのでこちらを採用した。

(注7) 本誌前号(上)の48ページは、〈現代薩隅方言で独立性の乏しい音節になっているもの〉ということにして、多音節語の場合は必ずしもそれがあてはまらない場合もあるようなので、いまこのように変更する。

(注8) ③～⑤から○○型を想定することも可能であるが、B型全体をおおうような型は、系統論的に存在し蓋然性は低いと思う。

(注9) 『国語アクセント史的研究 原理と方法』(塔書房、1974) 65～67ページ参照。

(注10) 金田一氏の「一覧表」には載っていないが、その出自アクセントから推定。早山氏の『全国アクセント辞典』の「全国アクセント比較表」ではこのグループを入れてある。

(注11) この理論的推定を文献の例から実証するのは難しそうであるが、ヒントになりそうなものが皆無さうなわけではない。例の『毛端私珍抄』(金春禪鳳、1455)に見える記述、〈なる事。《中略》五畿内・京府の声にもちる也。犬を ぬゝと云は京にちる也。犬を ぬゝと云は坂東・筑紫なり也。犬を ぬゝと云は四国なり也〉の場合は、「筑紫」の概念が明確でなく、たゞ西南九州二型アクセントの地域を含むものであったとしても、「犬」は二音節名詞第三類所属の語であるから確証はなしかたない。次のロドリゲス『日本大文典』(1604～1608)の記述は、やや注目される。〈都(Miyaco)の日本人は、上揚その他同類の同音異義語を、それらの語が持つてゐる自然で固有なアクセントによって区別する。然し、「下(Ximo)のものや他の諸地方のものは、それを間違つて、而も大部分の語を反対に発音するのである。〉(土井忠生氏訳本627～628ページ) ことに、「上揚その他同類の同音異義語」とは、訳本626～627ページに例示された一音節・二音節の名詞などを指し、特に二音節名詞では、(掬・着・端)(鼻・花)(煙・蜘蛛)(墨・隅)といった。現代でもしばしば引合ひに出される語の組が掲げられている。これらのアクセントが、当時京都で「下」(Ximo)の地方やその他の諸地方では反対であったというわけである。そうすると、当時の京府方言の二音節名詞アクセントは、第一・二・三類が高く始まり、第四・五類が低く始まる型であったから、「下」(Ximo)の地方やその他の諸地方では、第一・二・三類が低く始まり、第四・五類が高く始まる型であったと考へてよいことになる。これは現代の東京式アクセントと一致すると見なしてしまかたはなからう。ところで、ロドリゲス『日本大文典』には「下」(Ximo)の地方の具体的地名として、中国・豊後・肥前・肥後・筑後・高来・大村・筑前・博多(以上訳本608～611ページ) 豊前・日向・大隅・薩摩(以上訳本810ページ)などが掲げられている。このうち、南部九州の日向・大隅・薩摩は方言の記述が少なく、ロドリゲスがそのアクセントに親しんだかどうが疑いがないわけではないとしても、北部九州は布教の中心地であったからその言には十分信用性があるものと思はれる。すなわち、現代アクセントで西南部式二型となっている、長崎県本土の大部分や佐賀県中南部、熊本県西部などは、当然これらの「下」(Ximo)の地方に含まれるはずであるから、訳語に問題のない限り、西南九州二型アクセントが行なわれる地域が少なくとも北半分は、1600年頃には、二音節名詞に関して東京式アクセントとはほぼ同じものが行なわれていたと推定して不都合はないことになる。

(注12) (注6)に同じ。

(注13) このように三音節名詞・形容詞のアクセントを見てくると、先には保留しておいた〈二音節名詞+一音節助詞〉のA型アクセントの具体的調値の決定もどうやら無理なようで、安定した型で、例外の少ないものを再構築するとすれば、やはり○○△型、○○△型ということになる。

— 4 —

これまでのアクセント研究は、一音節乃至三音節の比較的少ない音節数の語を対象としたものが中心であった。しかし、近年ようやく、体系論的見地から、四音節語や五音節語のアクセントが重要視されるようになってきたようである。

ゴンザの言語における四音節語五音節語のアクセントも、その意味で、是非検討されなければならないが、ゴンザの場合はそれにとどまらず、系統を考える上においても重要であることが、以下の記述で明らかになるだろう。

まず、四音節語を検討する。用例数が限られているので、各品詞ごとの検討はせず、一括して考えることにする。

現代鹿児島主流アクセントにおける四音節語のアクセントは、丁寧な発音で、A型～〇〇〇〇型、B型～〇〇〇〇型の二型として実現する。ゴンザのアクセント符号とこれを順次比較してみよう。

〈四音節名詞〉

〇〇〇〇型 ～ 石段 (ísdan) 柿の木 (káknok') 鈴虫 (súzmuš) 釣針 (cúibai) 始まり (fá-zmai) 懐 (fúckura); 一門 (ičmon₂) 怒懣 (íngin₂) 三千 (sánzen) 三百 (sánbjak) = 以上〈A型〉

足軽 (á'gar) 書き物 (ká'kmon) 雷 (kámínare) 髪の毛 (kámínokě₂) 柿の木 (kúsnok') 数珠玉 (zúzdama) 耳掻き (mím'kak'); 行灯 (ándon₂) 八百 (fjáppak) 半年 (fánnen) 六百 (lóppjak) = 以上〈B型〉

〇〇〇〇型 ～ 銅 (akáganě) 甘酒 (amázakěš) 甕 (kědámón) 仕立屋 (štáčeja) 母親 (fáfá'oja) 継親 (mamá'oja₂) = 以上〈A型〉

朝飯 (asáměš) 鉄 (kuróganě) 父親 (čečé'oja) 舟方 (fnákata) 物差し (monósaš) = 以上〈B型〉

〇〇〇〇型 ～ 商人 (akjúdo) 猪 (inóš'is) 徒ら (itác-ra) 川舟 (kawáfñě) 川口 (kawáguč) 霜月 (šmóck') 帆柱 (fobá'šta) 三日月 (miká'ck') 群雲 (mrákmōz); フラスコ (firásko) = 以上〈A型〉

明後日 (asáčče₂) お袋 (ofúk-to) 花婿 (fanámko) = 以上〈B型〉

〇〇〇〇型 ～ 穴蔵 (anagúra) 鉄 (kuróganě₂) 舟方 (fnákata) = 以上〈B型〉

〇〇〇〇型 ～ 股引 (momobík') = 〈A型〉

後足 (atoš'š) 親指 (ojaíb') 九つ (kokonóc₂) 咎人 (toganín) 仲立ち (nakadáči) 鶏鳥 (niwatóiz) 腹帯 (farabób') 一時 (ftotók'); 一年 (ičnén) 三月 (sangwác) 七月 (šičgwác) 八月 (fačgwác) 六月 (lokgwác) = 以上〈B型〉

〇〇〇〇型 ～ 花卉 (fanabirá) = 〈B型〉

〈四音節動詞〉

〇〇〇〇型 ～ 打ち切る (účkir) 斬り合う (kínj'aw) 嗜む (tášnam) 暖もる (núkmon) 欲しがる (fóšgar₂); 飢える (kác'jur) = 以上〈B型〉

〇〇〇〇型 ～ 嫌がる (iágar) 塞がる (fšágar) = 以上〈A型〉

〇〇〇〇型 ～ 仕掛ける (šákur) 引かせる (fkásur) = 以上〈A型〉

合わせる (awásur, awásur) = 〈B型〉

〇〇〇〇型 ~ 肝入る(kimoír) 馬おす(damakás) 勤める(ctomúr) 流れる(magajúr)
; 服する(fuksúr) = 以上<B型>

<四音節形容詞>

〇〇〇〇型 ~ 短い(míjskaka2) = <B型>

以上を、各品詞列の用例数がわかるように数表にすると下のようである。なお、<三音節名詞+一音節助詞>のアクセントも再び取り上げて、※の欄に示した。

現代鹿児島 ゴンザの アクセント 助詞	A型 [〇〇〇〇]			B型 [〇〇〇〇]			
	※	名詞	動詞	※	名詞	動詞	形容詞
① 〇〇〇〇型	1(1)	10(12)		4(4)	11(13)	6(7)	1(2)
② 〇〇〇〇型	2(2)	6(11)	2(2)	1(1)	5(5)		
③ 〇〇〇〇型	6(8)	10(12)	2(2)	5(6)	3(4)	1(2)	
④ 〇〇〇〇型				2(2)	3(4)		
⑤ 〇〇〇〇型		1(1)		2(7)	13(15)	5(5)	
⑥ 〇〇〇〇型					1(1)		

この結果によれば、まずA型所属の語のアクセントは、容易に再構し得ると考えられる。即ち、1語1例の例外を除いて、残りの異語数39、延語数50の用例がすべて、第一音節かまたは第二音節にアクセント符号が打たれ、しかも、第一音節、第二音節のいずれに打たれるかは、第二音節の音声事情——狭母音[i] [i] [i] [i] や撥音などを含むか否か——によって説明し得るものであるから、丁寧な発音におけるゴンザのアクセント型は、〇〇〇〇型かまたは〇〇〇〇型であったと考えるのが最も妥当と思われる(注1)。

ところが、B型の方は問題である。少なくとも、現代鹿児島主流アクセントと同じ型、即ち〇〇〇〇型を再構すべき必然性はない(積極的にそのように見なせるのは⑥の1例だけであるから)と思われるが、アクセント表示はばらばらで統一性がなく、現代のB型に対応するただ一つの型を再構できそうにない。しかし、A型が完璧に再構できた以上は、B型の方も何らかの形で現実のアクセントを反映しているはずである。そうすると、まず考えられることは、現代鹿児島主流アクセントでB型という一つの型にまとめられる語彙が、ゴンザの時代にはいくつかの型に所属していたのではないかということである。しかし、これを実証するのは難しい。四音節語(特に名詞)における現代諸方言間の型の対応というのが、まだ明らかでない部分が多く、<二音節名詞+一音節助詞>や三音節名詞の検討の際に行なったような系統関係の援用ができてそうにないからである。

そこで、見方を変えて、次のように考えてみたい。《現代鹿児島主流アクセントのB型に対応するのは、ゴンザの時代もやはり一つの型であった。アクセント表示に統一性が見られぬのは、その型から外れる例外がかなり多かったからだ》。もっと具体的に言えば、こうなる。《現代鹿児島主流アクセントのB型に対応するゴンザのアクセント型は、標準的には表の④⑤から(消極的には③からも)再構し得る〇〇〇〇型であった。①~③の例外は、既に再構したA型に一致するものと見なされるから、現代アクセントでB型に属する語の中には、ゴンザの言語でA型に所属していたものがかなりあったのだ》。

このように考えようとするれば、当然、数多い例外に対して納得のゆく説明を与える必要がある訳であるが、一応考えられる理由は、次のようなことである。

(1) ゴンザの時代以降における、A型からB型への個別的な型の乗り替え。

(2) ゴンザのアクセント上の個人癖。

(3) いわゆる「基本型アクセント」に類するものの存在。

(4) 複合語に対する分析的アクセント表示。

これらを一々詳しく説明してゐるではないが、(1)はゴンザの出身方言そのものに理由を求めたもの。(2)～(4)はゴンザ個人に理由を求めたものである。例外の数から考えれば、これらのいくつが重なったものと思ふを得ない。

次いで、五音節語を検討する。現代鹿児島主流アクセントでは、A型～〇〇〇〇〇型、B型～〇〇〇〇〇型の二型として実現する。これとゴンザのアクセント符号を比較して示そう。ここでも各品詞は一括して扱うことにし、また<四音節名詞+一音節助詞>もここに収めた。

〇〇〇〇〇型～書き直す(kák'nawos); 雷が(kám'najega)＝以上<B型>

〇〇〇〇〇型～肋骨(abáraboné) 生まれつき(mmá'jecuk', mmá'jecuk)＝以上<A型>

〇〇〇〇〇型～異国人(ikókzin); 面白い(omó'stoka)＝以上<A型>

〇〇〇〇〇型～霜柱(simobá'fta); 見苦しい(migurú'ska₂) 珍しい(médzra'ska); 答人(toganín'to) 答人(=toganín'ni) 答人(=toganín'na) 答人(=toganín'wo) 鶏が(niwaró'iga) 物差しで(monosá'dze)＝以上<B型>

〇〇〇〇〇型～裏表(uraomó'če)＝<B型>

〇〇〇〇〇型～鳥麦(karasmú'g) 裸麦(fadakamú'g₂) 光物(fkaimón)＝以上<B型>

これらを数表にまとめることは省略するが、用例が「少ないにもかかわらず」、この結果はかなり明瞭である。即ち、現代鹿児島主流アクセントでA型となっている語は、〇〇〇〇〇型かまたは〇〇〇〇〇型を想定して例外がなく、またB型は、〇〇〇〇〇型を丁寧な発音における型として想定すれば、例外が少ない。そうすると、五音節語の場合も、ゴンザのアクセントは、現代鹿児島主流アクセントと全く違った様相を呈していたことになる。

また、これによって、例外が多かった四音節語B型を、〇〇〇〇型と推定したことが、一層確からしさを増すのではないだろうか。なぜなら、三～五音節B型アクセントが、これによって<後ろから二番目の音節にアクセントの山がある型を標準とする>という形で体系的にまとめられるからである。

【注1】〇〇〇〇型のアクセント表示が存在しないことからすれば、〇〇〇〇型のアクセントは、〇〇〇〇〇型とほぼ同様である。〇〇〇〇〇型でも、音のF(カ)目が認識しやすいと考えられるので、その可能性を捨てることはできない。五音節語A型のアクセントも同様である。

— 5 —

記述の都合で後回しになってしまったが、最後に、一音節名詞のアクセントを検討する。

平山輝男氏によれば、現代鹿児島主流アクセントでは、一音節名詞単独形のアクセントは、A型(いわゆる一・二類)～〇型、B型(いわゆる三類)～〇型または〇型の二型として実現する(注1)。が、ゴンザの言語では、アクセント符号は、次のようにA型B型の区別なく打たれている(注2)。

〇(〇)型～蚊(ká) 毛(ké, ké) 背(jé) 血(zí) 葉(fá₂) 日(fí) 帆(fò) 身(mi₂); 丸(kú)

五(gò)地(dzì) = 以上 <A型>

木(kì)西(sù)田(tà)午(zè, zé)茶(nà)荷(nì)齒(fà); 座(zà)四(jì)

字(zì) = (nì) = 以上 <B型>

以上を表にまとめてみよう。

現代鹿児島 ゴンザのアクセント	A型 [O]	B型 [O] or [O]
Ó(ò)型	11(14)	11(12)

また、一音節名詞に一音節の助詞が接続した場合、現代鹿児島主流アクセントでは、A型～ $\bar{O}\bar{\Delta}$ 型、B型～ $\bar{O}\bar{\Delta}$ 型の二型として実現するが、ゴンザのアクセント符号は、次のようには付され方になっている。

Ó $\bar{\Delta}$ 型～蚊も(kámo)も毛(kéwo)子ほ(kówa)子毛(kówo, ków)背の(sén)名の(nága)日ほ(fíwa)身ほ(míga)身毛(míto)身の(mínos)身ほ(míwa); 氣を(kíwo) = 以上 <A型>

木の(kínoz)西ほ(súwa)午毛ほ(zédza)茶を(náwo)荷毛(níto)齒毛ほ(fí-dza)火ほ(fíwaz)輪毛(wáwo) = 以上 <B型>

Ó $\bar{\Delta}$ 型～木(kinò)午毛(zégà)齒の(fanò)目の(ménò) = 以上 <B型>

以上を表にまとめてみると、次のようになる。

現代鹿児島 ゴンザのアクセント	A型 [O $\bar{\Delta}$]	B型 [O $\bar{\Delta}$]
Ó $\bar{\Delta}$ 型	12(15)	8(10)
O $\bar{\Delta}$ 型		4(4)

これらの結果を見ると、助詞接続形におけるÓ $\bar{\Delta}$ 型～B型の4語4例は、現代鹿児島主流アクセントB型のO $\bar{\Delta}$ 型に合致していて都合が良いが、数としてはむしろ劣勢で、A型と同じÓ $\bar{\Delta}$ 型が本来のようである。

筆者は、ゴンザのアクセント符号の打たれ方で、現代鹿児島主流アクセントの相とを照み合わせて、ゴンザの時代のアクセントを、次のように推定してみたい。

<A型アクセントは、 \bar{O} 型～ $\bar{O}\bar{\Delta}$ 型または $\bar{O}\bar{\Delta}$ 型で安定しており、B型アクセントは、 \bar{O} 型～ $\bar{O}\bar{\Delta}$ 型を本来とし、助詞接続形に若干O $\bar{\Delta}$ 型を生じつつある状態にあった>

このように考えれば、A型B型ともに、その相に区別がありながら、アクセント符号が同じ音節に打たれていてもおかしくないわけである。

ところで、上に再構したアクセントは、一音節内に音の下降、上昇があるとする、平山氏の御考えを参考ににしたものであるが、現代鹿児島方言音では、一音節語は、特にA型所属語の場合、やや長めに発音されるのが普通であるという(注3)。思うに、この傾向は新しく生じたものではなく、時代をさかのぼれば、もっと規則的なものではなかっただろうか。ゴンザの言語には、長音を示すような文字や記号は見られないが、これはロシア語の特長から説明できるもので(注4)、ゴンザの発音が短かったという証しにはならない。もしこのようなことが言えるとすれば、再構されたゴンザのアクセントは、あるいは、A型= $\bar{O}\bar{O}$ 型～ $\bar{O}\bar{O}\bar{\Delta}$ 型または $\bar{O}\bar{O}\bar{\Delta}$ 型、B型= $\bar{O}\bar{O}$ 型～ $\bar{O}\bar{O}\bar{\Delta}$ 型(若干 $\bar{O}\bar{O}\bar{\Delta}$ 型)という形であったとも考えられ、単独形の場合は、既に見た二音節語の型に、助詞接続形は三音節語の型に準じて考えることができ、一層体系的に整理できるのではなかっただろうか(注5)。

- (注1) 平山輝男・大島一郎両氏編『現代日本語の音声と方言』(汐文社、1975) 253~254頁に於て参照。
 なお、 $\bar{\circ}$ は下降調に発音される音節、 $\bar{\circ}$ は上昇調に発音される音節を示す。
- (注2) このような場合には、あるいはアクセント符号の付されていない語も検討すべきかもしれないが、二音節名詞の所で扱ったように、やはりゴンザのアクセント符号の打ちもらしを考へらるゝので記述を省略した。
- (注3) 九州方言学会編『九州方言の基礎的研究』(風間書房、1969) 235頁に於て参照。
- (注4) ロシア語における音の長短は、日本語のような短音・長音の音韻的対立とは性格が異なり、3拍アクセントのある音節は長く発音され、それ以外の音節では短く発音されるという特徴がある。そして、一音節語には原則として必ず強アクセントがあり、従って長く発音される(本誌前号(上)の51頁に於て(注1)参照)。
- (注5) 「 \sim 」は、一音節分長く引くことをあらわす。なお、金田一春彦氏によれば、琉球方言の一部では、「手」などの一音節名詞第三類(二型方言のB型に相当)が、 $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型に発音されるという。これを金田氏は、平安末以来、一音節分長く発音する習慣のもてで、規則的なアクセント変化に従ってできたものだと解釈された。ゴンザの出身アクセントも、これと同じ道を行つたものとは考へらるゝであろうか。同氏『日本の方言-アクセントの変遷とその実相』(教育出版、1975) 143~145頁に於て参照。

— 6 —

以上で、ゴンザの言語資料に見られるアクセント符号の具体的な検討を終ることにし、この節では、これまでのまとめと、ゴンザのアクセントの性格についての、若干の考察を行ないたいと思う。

初めに、これまで想定されたゴンザのアクセントの音声学的な相を、一覧表にまとめてみると、次のようになる。型は、すべて丁寧に発音した場合を想定している。十は、一音節助詞接続形を示す。

音節数	言語形式	A 型	B 型
1	一音節名詞	$\bar{\circ}$ 型($\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型)	$\bar{\circ}$ 型($\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型)
2	一音節名詞 + 二音節名詞	$\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型($\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型)または $\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型($\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型)	$\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型($\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型); $\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型($\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型) ←考
	二音節動詞	$\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型	$\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型
	二音節形容詞	(用例なし)	$\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型
	二音節名詞 + 三音節名詞	$\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型または $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型	$\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型; $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型 ←考
3	三音節動詞	$\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型または $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型	$\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型; $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型 ←考; $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型 モアカ
	三音節形容詞	$\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型または $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型	$\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型; $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型 ←考
	三音節名詞 + 四音節名詞	$\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型または $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型	$\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型
4	四音節動詞	$\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型または $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型	$\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型
	四音節形容詞	(用例なし)	(不明確)
	四音節名詞 + 五音節名詞	(用例なし)	$\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型
5	五音節動詞	(用例なし)	(不明確)
	五音節形容詞	$\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型または $\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型	$\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}\bar{\circ}$ 型

この表を一見して、まず注目されるのは、現代鹿児島アクセントでA型となっているもののうち、三音節以上の多音節語の場合は、すべて第二音節のあとに音の下がり目が想定されていることである。これは、ゴンザのアクセントが現代鹿児島主流アクセントとは違って、むしろ長崎市や佐賀市を中心とする西北部九州式ニ型アクセントの相に近いことを示している。そうすると、ゴンザの時代には、現代鹿児島主流アクセントの地域は、長崎式アクセントでおおわれていたことになるのだろうか。これは有り得ることだと思う。なぜなら、長崎式アクセントの地域と、現代鹿児島主流アクセントの地域は、隣接して分布しているから【注1】、一方からもう一方へ変化したことが考えられるし、また長崎式から現代鹿児島式への移行も、十分に説明できるものだからである。(これについては後述。)

一方B型は、多音節語の場合、後ろから二音節目のあとに音の下がり目が想定される型、即ち、現代鹿児島主流アクセントのA型に相当する型を、一応の標準的な型として再構成したことになる。このような型は、現代西南九州ニ型アクセントの地域内には見出し難いようである【注2】。ただ、このB型は、A型ほどの安定度はなく、現代鹿児島主流アクセントと同じ型に移行しつつある語がかなり見受けられた。特に、三音節名詞・三音節形容詞がそうである。これには、それなりの理由があると思われる。というのは、三音節語の場合、再構成したアクセント型は、A型もB型も、第二音節のあとに音の下がり目が想定されているが、このような型の併存は、型の弁別という点ではかなり都合の悪いものではなかったか。おそらく、名詞の場合は助詞が接続するアクセントで、また形容詞の場合は活用形のアクセントで区別されていたものと思われるが、単独形または基本形そのものに明確な区別があることに越したことはない。名詞の場合は、「頭」類の存在もあったが、おおよそのような理由が考えられると思う。ところが、同じ三音節でも、〈二音節名詞+一音節助詞〉の場合は、現代アクセントへ移行する例は稀であった。この理由については、現代の鹿児島県屋久島宮之浦アクセントに触れられた金田一春彦氏の、次の御言葉が示唆的ではなからうか。〈B型3拍名詞の単独の形が宮之浦方言で○○●型であるのは、この地方にも、一般的には、長崎方言などと同様な○○○型→○○●型の変化が起こったものと思う。つまり〈B型2拍名詞+助詞〉の形が○●▷型であるのは、二語という意識と、名詞の部分のアクセントを変えないという心理がはたらいて、古い○○○型から変化しなかったものと思う。〉(注3)ゴンザの出身地では、結局○○▷型→○○▷型の変化が起こったわけであるけれども、上のような理由で、他の三音節語に後れて移行したことは十分に考えられると思う。なお、四五音節語に例外がほとんどないことも、同じように音の下がり目の位置を問題にすれば済むものと考えられる。

かくして、このようなB型は、アクセントの山を最終音節に送ってしまうは、現代鹿児島主流アクセントに一致するが、それは同時に、長崎式アクセントにも一致することになる。従って、ゴンザのアクセントは、A型B型全体として見れば、長崎式アクセントの一步手前にあるアクセントだと言ってよいだろう。

次に、ゴンザのアクセントの音韻論的解釈と、ゴンザのアクセント体系から現代アクセントの体系への移行の可否について考えてみたい。ゴンザのアクセントの音韻論的解釈は、ある意味では蛇足かもしれないが、アクセントを体系として論じたり、他方言のアクセントの性格と比較したり、さらにはアクセントの系統を考える場合にも便利だと思うからである。

ゴンザのアクセントは、音韻論的には、下のように解釈されるものと考えられる。(B型は標準的なアクセントを取っている)

音節数	A 型	B 型
2	/O ¹ O/	/OO ¹ /
3	/OO ¹ O/	/OO ¹ O/
4	/OOO ¹ OO/	/OOOO ¹ O/
5	/OOO ¹ OOO/	/OOOOO ¹ O/
⋮	⋮	⋮

ここに、「1」は、「アクセント核(下り核)」を表示すると言っても、「アクセントの境」を表示すると言っても、どちらでも良い。便宜上、「核」を用いるならば、ゴンザのアクセント体系は、《A型は、二音節語の場合は第一音節に、多音節語の場合は第二音節にアクセント核があり、B型は、二音節語の場合は第二音節に、多音節語の場合は後ろから二番目の音節にアクセント核のある体系である》と言うことができる。なお、一音節名詞単独形は二音節語に、〈一音節名詞+一音節助詞〉は三音節語に、それぞれ準じて考えた。

そうして、このアクセント体系の弁別的特徴を、《アクセント核があるかないか、あるとすればどこにあるか》などといった捉え方をするならば、《アクセント核がどこにあるか》の一元で弁別される体系と言うことができよう。このような体系は、現代九州方言で言うならば、福岡市を代表とする「筑前アクセント」の体系に似ていると言えるが、音節数が増しても二型とまりと見られる点で違っている。

さて、再構されたこのような体系が、信用すべきものであるためには、一番最初に触れたように、現代アクセントの体系への移行が、無理なく説明できるものでなければならぬ。これは可能であろうか。筆者は十分に可能であると思う。

現代鹿児島主流アクセントの音韻論的な解釈は、さまざまあるけれども、ここでは金田一春彦氏のもの(注4)を、体系論的のみならず、系統論的にも最良のものとする(ただし、氏にとっては、あくまで「トネーム」による解釈に次ぐものとしてであるが)。それは、次のようである(氏の場合の「1」は、「アクセントの境」。なお、五音節の場合は、筆者の類推による)。

音節数	A 型	B 型
2	/O ¹ O/	/OO ¹ /
3	/OO ¹ O/	/OOO ¹ /
4	/OOOO ¹ O/	/OOOOO ¹ /
5	/OOOOO ¹ O/	/OOOOOO ¹ /
⋮	⋮	⋮

まずB型は、ゴンザの多音節語における核が、それぞれ一つ後ろにずれるが——実際には、むしろある——現代アクセントに一致するから、容易な変化だと言える。

またA型は、四音節語の場合に、B型と同様な核の移動があったと思われる。五音節以上

の場合の、ゴンジの核の位置から現代アクセントの核の位置への移行は、一見唐突のようであるが、必ずしもそうではない。これはおそらく、所屬語彙の多い二音節語・三音節語の型、即ち末尾から二番目の音節に核があるという形に類推したものとと思う(注5)。なお、言うまでもないことであるが、A型のこのような移行は、B型の移行が完了した後に行なわれたはずである。

以上、この他にも触れた問題もあるが、紙幅の関係で省略は従いたいと思う(注6)。

(注1) 平山氏『九州方言音調の研究』によれば、A型における長崎式と鹿児島式の境界線は、熊本県中部に引くことが出来る。南部の、いわゆる芦北式アクセントは色々変わっているが、音のFの位置は鹿児島式に同じである。なお、天草諸島は、中北部が長崎式、南部が鹿児島式のようである(上村孝二氏「天草島方言のアクセント」鹿児島大学文学部論集7, 1971参照)。また、この長崎式は、鹿児島県本土でも、反対側の屋久島の主要部(市田・一渡・安房・屋久間・粟生など)にも分布している(上村孝二氏「屋久島方言の研究—音声の部—」鹿児島大学文学部論集2, 1966参照)、注目される。

(注2) (注1)で引いた上村孝二氏「屋久島方言の研究—音声の部—」には、部分的にこのような型をもつ方言が報告されていて興味深い。それは宮之浦方言で、ここでは、二音節名詞・三音節名詞に一音節助詞が接続した場合に限り、末尾から二音節目、即ち語末にアクセントの山が来るのが標準的な型なのである。<一音節名詞+一音節助詞>に限るなら、このような型は長崎県三河内、早岐地方にもあり(平山氏『九州方言音調の研究』参照)。これは一時代前の古い型を保持しているものと考えられる。

(注3) 『日本方言—アクセントの変遷とその奥相—』(教育出版, 1975) 45, 47頁を参照。

(注4) 「柴田君の『日本語のアクセント体系』を讀んで」(国語学26, 1956)。「私のアクセント非段階観」(国語研究17, 1963)参照。

(注5) 四音節語の場合も、むしろこの類推によるものかもしれない。多音節語におけるこのような核の移行は長崎式アクセントの地域内でも時には見られる(平山氏『九州方言音調の研究』141頁を参照)。比較的起り易い変化と考えられる。

(注6) したがって、本誌前号(上)の1は1は1で触れた柴田氏のアクセント(1)~(4)について、再構されたゴンジのアクセントからはどのように説明されるか、簡単に述べておきたいと思う。

- (1)について、二音節名詞単独形の場合、再構されたゴンジのアクセント型は、現代鹿児島主流アクセントの型と同じである。従って結果的に「正しいアクセントを反映する」とはなった。
- (2)について、「花」はB型所屬語であるが、これは一音節の助詞が付いた場合のゴンジのアクセント型は、〇〇△型と再構された。従って、fanáwoはこれに符合している。
- (3)について、ゴンジのアクセントがどのように再構されるか、この疑義は有効である。しかし、ゴンジの言語では、アクセント符号が二通り以上に付いている場合はそれほど多くは、から、これはゴンジのアクセントそのものを疑うのは妥当でない。
- (4)について、この語は長音短音を蔽っているとも考えられるので、この補正は扱わなければならない。現代鹿児島主流アクセントではA型に所屬する語である。本来、第二音節に長音を含む五音節語であるから、ゴンジのアクセントでは[〇〇〇〇〇]に実現すべきものと考えられる。この第二音節が短呼された場合は[〇〇〇〇]となり、ゴンジのアクセント符号の打たれ方、dʒóqaijaはこれと符合する。

— おわりに —

18世紀前半、ロシアの地に残された、漂流民ゴンザの言語が、アクセント資料としても有意義なものであることが、以上の考察でやや明らかにされたものと思う。その結論を、再び大略を示せば、次のようになる。

- ① ゴンザの言語資料におけるアクセント符号には、彼の母語の体系的なアクセントが反映しており、信用するに足るものである。
- ② そのアクセント体系は、現代鹿児島方言をはじめとして、西南九州方言に支配的に分布する二型アクセントとほぼ同じものであったらしい。
- ③ しかして、その二型アクセントの具体的な様相は、いわゆるA型は、二音節語においては第一音節に、多音節語の場合は第二音節にアクセント核のある型で安定しており、B型は、二音節語では第二音節に、多音節語の場合は後ろから二番目の音節にアクセント核のある型を標準とし、一部最終音節に核を移してつある状態にあったらしい。
- ④ このようなA型B型をあわせもつアクセント体系は、現代西南九州二型アクセントの地域内には見あたらないようであるが、A型は長崎式に一致し、九州西北部の一定の範囲に分布する型である。またB型も、各語の最終音節に核を移し終われば、長崎式に一致する。従って、ゴンザのアクセントは、全体として見れば、長崎式の一步手前にある体系と見ることが出来る。
- ⑤ ゴンザのアクセント体系から、現代鹿児島主流アクセントの体系への移行は、無理なく説明出来るものと信ずる。
- ⑥ さらに付け加えるならば、ゴンザのアクセント体系は、比較し得る限りにおいて、現代鹿児島主流アクセントの中間的な祖と理論的に推定されている豊前・豊後アクセントの体系から推移したものと考えて特別の支障を来たさないと考えられる。
- ⑦ 従って、上の④⑤⑥から導き出されるのは、次のような九州方言の主要アクセントの系譜の可能性である。

豊前・豊後アクセント → [ゴンザのアクセント] → 長崎式アクセント → 現代鹿児島主流アクセント

ただし、以上はあくまで「ゴンザの出身地は現代鹿児島主流アクセントの地域内」であり、「ゴンザの時代以降、他方言アクセントの侵入、取り替えはなかった」とも前提した上での結論である。今後の研究の進展によってこの前提がくつがえされた場合には、改めて検討し直す必要がある。

なお、小稿では、ゴンザのアクセント体系の再構という点に力を注いだために、次のような細部のアクセントまで網羅することができなかった。後日、然るべく稿を整えたいと思う。

- (1) 個別的な例外アクセントの解釈
- (2) 動詞・形容詞などの活用形アクセント
- (3) 連母音融合形・助詞融合形などのアクセント
- (4) 長音短呼と疑われるものアクセント
- (5) 連文節におけるアクセント
- (6) 『全国アクセント辞典』に比較し得ないもの(俚言・古語)のアクセント
- (7) ……………

【付記】

本誌前号(上)の47～50ページに、アクセント符号の打ちもらし、用例の見落とし、アクセント型の誤認がありました。お詫びして、次のように補訂します。

- アクセント符号の打ちもらし
三(sann)→三(sánn), 鍵(kag')→鍵(káq'), 皮(kawás)→皮(kawàs) [以上50ページ]
- 用例の見落とし
○○型～B型 亀(kámě), 鞍(kúra) [以上50ページ]
- アクセント型の誤認
○○型～B型 股(momò) → A型に訂正 [49ページ]
○○▷型～B型 露か(cúiga) → " [47ページ]
○○▷型～B型 布子ほ(monódza) → " ["]

従って、49、47ページの表、および解説における百分比は若干の変更を要しますが、全体の趣旨には影響を与えないものと思います。

【追記】

本稿を直す際、および(上)を公けにした段階で、田尻英三氏、崎村弘文氏、木部暢子氏、高山倫明氏、望月正道氏、その他の方々から有益な御助言をいただきましたが、筆者の理解不足から十分記述に反映させることができなかったことをお詫びします。特にアクセントを担う単位の問題、即ちモーラかシラビームかについては、多くの御指摘を受けながら今回は触れ得ずに終わりました。いずれ「追考」の形で考えを述べてみたいと思います。この問題に限らず、筆者の考えは、未熟な点、あるいは武断に過ぎる点も多かろうと思います。大方の御修正をたまわれば幸いです。

——宮崎大学講師——